
バレンタイン

ッ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタイン

【Nコード】

N7727Q

【作者名】

ツ

【あらすじ】

2月14日。バレンタインデー。

全国の女子たちがプレゼントと共に想いを告げる裏で、一部の男子たちによって行われるイタズラ。初投稿の作品です。

(前書き)

イタズラのために、教室内を走り回る話です。

昼休み中盤。伊藤が教室を出た。トイレに行ったのか、それとも他のクラスに行ったのか。いずれにせよ、最低でも、あと2、3分は戻ってこないだろう。いける！僕は席から立ち上がると、机の横に掛けてあったバッグから、昨日スーパーで買ったチョコレート11個入り（税込525円）の箱を取り出す。今日は一年間待ち続けた決着の日、2月14日（月）。今年も伊藤と同じクラスであったことは、単なる偶然か、それとも、神の思し召しか。まあ、そんなことはどうでも良い。

深呼吸の後、僕は伊藤の席を目指して、疾風の如く駆け出した。作戦、開始。

――去年の2月13日（土）。

帰宅後、バッグが朝持って行ったときよりも明らかに膨らんでいることに気が付いた。教科書・ノート類は全て机の中に置いたままにしていたから、その日、僕は学校で一度もバッグを開けていなかったのに、である。

「ま、まさか……！」

僕は呟き、だが、すぐに首を振った。バッグを膨らませているものの、それがチョコであるはずがない。今日はバレンタインではない。普通の土曜なのだから、と。

「だが……」

僕は唾を飲む。今年のバレンタインは日曜。日曜に渡せないから今日、ということも有り得るんじゃないか？

期待で胸が爆発しそうになるのを感じつつ、僕はバッグのジッパーに手を伸ばした。目を閉じ、ゆっくりと、スライドさせていく。部屋に響く、ジッパーの音。そして……。

バッグの中に、高級感溢れる黒い箱があった。両手に拳を握り、

雄叫びを上げる。恐る恐る、箱を取り出す。そこには黄金こんじきに輝く「
chocolate」の文字が、確かに記されていた。

……しかし、週明けの月曜、僕は衝撃的な事実を知ることになる。
同じクラスの伊藤が朝、僕に近づいてくるなり、言ったのだ。

「あのチョコ、俺が入れたから」

一瞬、意味が分からなかった。「ああ、伊藤はホモだったのかあ」と思ったくらいだ。そして、その後ようやく押し寄せる、絶望、悲しみ、怒り……。つまり、僕はまんまと、バレンタインにありがちなイタズラに引っかかってしまったのだ。僕のバッグにチョコを入れたのは、女子ではなく、伊藤。当時、段々と髭が濃くなってきていた真正銘、男。当時、趣味が「ONEPEACE」（史上最高の、夢と友情の海賊アクション。必読!）と「さよなら絶望先生」（現代社会を鋭い視点で風刺し続けている。必読!）だった真正銘、男。

彼が言うには、チョコを見つけた僕がどんなリアクションを示すか、見物しようとしていたらしい。

「でもオマエ、気付かないで帰っちゃうんだもんなあ。大体、オマエなんかチョコやる女子、いるわけないじゃん」

伊藤は言った。笑いすぎて咳き込みながら。あのとき感じた屈辱は、今でも忘れられない。

——そう、あのとき感じた屈辱。それを打ち消すために、一年後の今、僕は教室内で、机やクラスメートたちの間を駆け抜けているのだ。女子が机に広げる友チョコの甘い香りや、教室全体に漂う男子の淡い期待、そして、自分の忌まわしい過去。それら全てを切り裂くように。

……だが、勘違いしないほしい。僕は伊藤を恨んではない。あの事件後も、僕は彼と、それまで通りに接している。けれど。それでも時々、思い出してしまうのだ。あの、屈辱を。どうしようも

ない、怒りを。

だから、僕は彼と本当に心の底から笑い合うために、やり返さなければならぬ、と思う。仕返しすることで、僕の心を晴らす。屈辱や怒りを消し去り、元の2人の関係に戻るには、それしか方法がないのだ……。

伊藤の席が近づいてきた。僕は膝を突き、滑るようにして、机ギリギリのところで、停止。膝が摩擦で熱かったが、そんなことを気にしている時間はない。すぐにチョコを床に置き、チョコを入れるため、ヤツのパックを開ける。

が、思わぬ誤算。パックには、はち切れんばかりに、ものが詰め込まれていたのだ。ほとんどが教科書やノート、パンの包装。しかし、それらが占めている割合はパック全体の空間の3分の2といったところだ。残りの空間をたったひとつで支配するもの。そう、

——「週刊少年ジャンプ」だ。

普段、ジャンプは週初めの憂鬱な気分を吹き飛ばしてくれる僕の強い味方だが、今日だけは違った。ジャンプは大きくて、分厚いのだ。その大きさは、その厚さは、作戦遂行という名の道を遮る、巨大で強固な壁を思わせる。

思わず、舌打ち。今日ほどジャンプの発売日が月曜であることを恨めしく思ったことはない。

……仕方ない。パックに入れるのは諦めよう。

かなり手こずりながらも何とかジッパーを再び閉め、今度は机の中に入れようと椅子を引く。ところが、そこには驚愕のトゥーン・ワールドが広がっていた。伊藤の趣味は、去年より、さらに進行していたのだ。

全巻揃ってるんじゃないか？ というほど大量の「ONE PIECE CE」の単行本が机内部、左側のエリアを完全に支配し、これまた、全巻揃ってるんじゃないか？ というほど大量の「さよなら絶望先生」の単行本が机内部、右側のエリアを完全に支配していた。

僕は何とかチョコを入れようと、縦にしたり、傾けたりするが、……ダメだ。一切の隙間がない。僕はジャンプ漫画とマガジン漫画の、最強タッグを前に、為す術もなかった。

……いっそ、このまま机の上に置いていくか。でも、それじゃイタズラだってバレバレだ。どうしよう。ああ、時間がない。落ち着け、僕。

……と、そのとき、後ろから伊藤の声。

「何してんだよ？」

「うわぁ！」

僕は慌てて立ち上がろうとして、机に足を引っ搔けた。そのまま机ごとクラッシュ。

「何してんだよ!？」

伊藤が呆れたように、繰り返す。

「あや、いや、あの、その」

僕は慌てて立ち上がって、机を立てる。中から大量のONPE ACEと絶望先生が、足元に溢れだす。サンジ、小森さん、ゴメン！

「おい! ……って、何だ、コレ」

僕は伊藤が指差す先を見る。そこには机の下敷きになったらしいチョコの箱が、無惨な姿で潰れていた。



チョコは箱こそ潰れたものの、中は無事で、僕と伊藤、それから他のクラスメート数人で昼休みのうちに食べた。結局、伊藤にバレてしまい、作戦は失敗したけれど、なぜだろう。晴れ晴れした気分だ。多分、伊藤が、僕が伊藤を騙そうとしたことを話しても怒らずに、僕が落とした漫画を、一緒に拾ってくれたからだろう。

今、僕は思う。作戦自体が必要ないものだったのだ、と。騙されたことを、笑い飛ばす。イタズラとはいえ、タダでチョコを食べら

れたことを、素直に喜ぶ。それだけで良かったのだ。

僕は、最後のひとつ、ハート型のチョコをつまみ上げながら、ふと考える。今日は2月14日、バレンタインデーだ。今日だけで一体どれくらいのカップルが成立したのだろう。

「くっ、リア充め……」

なんだか無性に悔しくなって。でも、良かったな、とも思った。僕は鼻を鳴らして、チョコを口に放り込んだ。

（後書き）

読んで頂いた方、ありがとうございました。感謝します。

実は僕も小説に書いたみたいなのイタズラの、被害者で。

まあ、加害者でもあるんですが……。

感想、レビュー、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7727q/>

バレンタイン

2011年2月11日21時25分発行